



八戸

八戸市の水産業の現状について講義する武輪会頭

ハマの現状と今後
「地域学」で講義

武輪商議所会頭

八戸市と八戸商工会議所、市内四つの高等教育機関でつくる八戸産学官連携推進会議（会長・熊谷雄一市長）はこのほど、本年度の「八戸地域学」を同市のはっちで開講した。第1回は、地元水産加工会社社長でもある、同会議所の武輪俊彦会頭が「漁業及び水産加工を含むハマの現状と今後」と題して講義。同市の水産業の歴史や今後の展望について解説した。

同推進会議は2018年、人材育成や学びの推進、若者定着などを図ることを目的に設立。22年10月に八戸地域学がスタートした。八戸学院大と同大短期大学部、八戸工業大、八戸工業高等専門学校、4校の共通講義となっている。

講義では、八戸港が1966年から3年連続で水揚げ量日本一となり、88年には過去最多（81万9千ト超）を記録したが、その後は海水温の上昇などで資源量が減り、昨年は3万ト弱にとどまった状況を説明。現状打開に向け、「漁船誘致や養殖などで復活を目指している」と解説した。

加工分野では、昔の加工風景を映した写真をスクリーンで見せながら、これまで作られてきた製品を紹介。原料不足に苦しむ中、蓄積した技術を武器に今後は「新たな価値創造にチャレンジしていく」と語った。

講義はユーチューブで4校に限定配信される。

（野上圭佑）